

ともにつくる居場所づくり「農・福・観（環）」連携事業 地域みんなで創り出す！富士見町産じゅんかん育ち

取組に至る背景・事業の目的

当団体では 2019 年発足当初から自然豊かな富士見町の地域資源を活かし、同町に暮らす人、訪れる人が交流しながら楽しめる農をベースにした居場所づくりに取り組んできた。地域住民には参加者へ自身の得意なこと（農作業・料理・ものづくりなど）を参加者に教えることを通して役割ややりがいをもって元気に暮らし続けてほしい、また地域の魅力を再発見して訪れる人に伝えていってもらいたい、もう一方で、参加者には地域の人から教わりながら一緒に農作業や料理・ものづくりワークショップに取り組むことで富士見町での暮らしに関心をもってもらいたい、という思いで活動をしてきた。2022 年度はこうした活動を継続発展させていくための仲間づくりを目的に、これまで活動の一環として地域住民・参加者と一緒に取り組んできた「富士見町産じゅんかん育ち」の野菜やお米づくりが、環境・経済・社会的にどんな意義や影響があるのかを改めて学ぶための「じゅんかん育ち勉強会」を実施した。

事業内容

じゅんかん育ちの栽培に取り組む意義や効果、ゼロカーボンとの関連性を各分野の専門家による座学（【実施】4 回【参加者】リアル 29 名＋オンライン 21 名）と野菜やお米の栽培、副資材の利用、関連施設の見学などの実践（【実施回数】21 回【参加者】リアル 102 名）を通して学び、富士見町ならではの資源の循環利用モデル構築に地域協働で取り組んだ。また、本勉強会の中で得られたデータや情報を冊子「富士見町産じゅんかん育ちのすゝめ」にまとめて配布した。



【田んぼオーナー田植え後の集合写真】

事業効果

- ① 勉強会を通して一緒に学び、農作業を行うことで地域住民と参加者が交流を深めることができた。参加者延人数 152 名、講師 16 名。（勉強会参加費売上 59,500 円）
- ② 土壌の物理性・化学性を分析し総合評価点を比較。12 圃場のうち有機物を 2 年以上積極的に施用をした 6 圃場（19a）の平均は 67 点、慣行農法の 5 圃場の平均は 62.8 点となり、有機物施用の地力向上（炭素貯留量増）への有効性が確認できた。
- ③ 耕作放棄地・休耕田（19a）を試験圃場として活用。古民家 1 件を勉強会の会場として利用。また、農業資材としても汚泥発酵肥料・落葉・米ぬか・菌床・穀殻を堆肥化、さらに、町内の竹林から切り出した竹を竹炭にして畑に還元するなど、地域にあるものを活用して化学肥料の代替として循環利用することで廃棄物の減容や放置竹林の延伸防止に貢献。
- ④ ②③の実現により、じゅんかん育ちのコシヒカリの食味値が過去最高得点の 98 点となり、ふるさと納税の返礼品としても採択された（売上 39,500 円）。また、じゅんかん育ちのキタアカリを分析した結果、糖度・抗酸化力・ビタミン C・硝酸イオンいずれも平均値以上で、身体に美味しい農産物コンテス 2023 のじゃがいも部門にノミネートされ高評価を得ることができた。
- ⑤ 地域住民とあわせて町内外の多くの個人・団体が勉強会の講師や参加者として参画。こうした繋がりから地元企業と新たな農業体験企画の共催へも発展し、事業化の足掛かりとなった。

工夫・苦労した点、課題、今後の取組など

今後はじゅんかん育ち勉強会を通して地域住民や有識者の方々から学んだ様々な知見をまとめた冊子「富士見町産じゅんかん育ちのすゝめ」を活用し、富士見町産じゅんかん育ちの栽培に取り組む仲間を増やし、環境と経済が両立する富士見町産ならではの資源循環型農業の実現を目指していく。また、勉強会や農業体験を交流コンテンツとして活用し、誰もが役割をもって活躍しながら楽しめる、農をベースにしたコミュニティの形成を目指す。こうした取り組みを持続可能で発展的な事業にしていけるような仕組みづくりが課題である。

【評価のポイント】

下水道汚泥や遊休耕作地等の地域の未利用資源を活用するとともに、地域住民や外部団体を巻き込んだ取組となっており、ふるさと納税の返礼品にも登録されるなど今後も地域活性化が期待される。

団体名 合同会社つくえラボ
連絡先 0266-55-5882 / tsukuelab@gmail.com
ホームページ <https://www.facebook.com/tukuelab>

事業タイプ ソフト事業
事業費 1,932,334 円
支援金額 1,545,000 円